

Title	太田絵里奈君提出博士学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.90, No.2/3 (2022. 5) ,p.179 (309)- 185 (315)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20220500-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

太田絵里奈君提出博士學位請求論文審査要旨

論文題目

「後期マムルーク朝有力官僚の生存戦略

—ザイン・アツィディーン・イブン・ムズヒルの家系・経歴・パトロネージ—

本論文は、中世後期のイスラーム世界におけるスンナ派の盟主的国家マムルーク朝の末期に、財政難から売官制が定着した支配体制において、二六年間の長期にわたり文官の最高職である文書庁長官を務め、国政に多大な影響力を行使したムズヒル家のザイン・アツィディーン・イブン・ムズヒル（一四二八—八八）について、その生存の戦略が如何なるものであったかという問題を設定し、多面的に考究した労作である。そこでは主にプロソボグラフィの手法で、アラビア語の伝記集や年代記などの同時代諸史料から集めた関連情報を分析することにより、この有力官僚と同家系の構成員たちの経歴や活動が可能な限り具体的に再構成され、婚姻に基づく人的な紐帯の広がりや機能、イスラームの両聖地巡礼を活用したジャマア（党派）の形成と同地における慈善救貧事業の実態、首都カイロのイスラーム諸学の学者たちを対象とした支援・保護・統制の諸相が詳細に検討され、さらに同家の没落過程とその要因についても隆盛期との比較によって論じられている。

本論文の構成は以下のとおりである。

序 マムルーク朝官僚をめぐる先行研究と問題の所在

第一章 ザイン・アツィディーンの家系と経歴

第一節 ムズヒル家の来歴

第二節 ザイン・アツィディーンの経歴

第三節 カーティブ・アツィスィツルとしてのザイン・アツィディーン

第二章 婚姻を通じた家族戦略

第一節 ムズヒル家の婚姻結合—概要

第二節 官僚の再生産—書記としての教育

第三節 任官への支援—母ハデイージャのプロフィール

第四節 執り成し—失脚に対する備え

第三章 ザイン・アツィディーンとハラマイン

第一節 巡礼

第二節 ハラマインにおける慈善・善行

第四章 ザイン・アツィディーンとウラマー

—パトロネージを通じた理想的官僚像の形成

第一節 同時代ウラマーのザイン・アツィディーン評

第二節 ビカーイーとザイン・アツィディーン

第三節 ウラマーに対するパトロネージと統制

結 後期マムルーク朝社会と官僚のキャリア戦略

第一節 官僚名家としての終焉

第二節 総括と今後の課題

参考文献

- 参考文獻
 附表 (1 ムズヒル家関連年表, 2 ムズヒル家系図, 3 ザイン・アツィデインの経歴, 4 ムズヒリヤ学院関係者一覧, 5 八七二—一四六七年の巡礼におけるザイン・アツィデイン関係者一覧, 6 第四世代の生存年代, 7 第四世代の割礼式に関する記述, 8 バドル・アツィデイン三世の逮捕, 9 後期マムルーク朝のカーティブ・アツィスィツル一覧, 10 カーイトバリーイ治世の法／文書行政職就任者一覧)

図版 (1—3)

各章の要旨

序は、マムルーク朝の文民官僚をめぐる先行研究の展開、その現状と課題に関する論述から始まる。著者はそこで、後期マムルーク朝の文民エリート出身地・居住パターン・要職獲得の傾向性などに関して統計的な分析を試みたC・ペトリの研究書、一五世紀の官僚名家に焦点を当てたB・マルテルトウミアンの専論を重視し、特に当該テーマの研究を大きく前進させた後者の成果と限界を踏まえつつ、古代ローマ史や近代イギリス史などの分野で成果を上げてきたプロソポグラフィ(集団的伝記研究)の手法を導入し新たな照射をめざすことが言明される。検討対象としては、財政難による試練の時代のマムルーク朝末期に生き延びた有力文民官僚、ザイン・アツィデイン・アブー・バクル・イブン・ムズヒル(以下、ザ

イン・アツィデイン)に的を絞り、彼とその家系、すなわち約百年にわたり有力官僚を輩出したムズヒル家について、サハーウイー(一四九七歿)の『カーディー列伝統編』やビカーイー(一四八〇歿)の『時代の明示』、ザイン・アツィデインの設立したムズヒリヤ学院の寄進証書(エジプト国立文書館所蔵)など未活用の重要史料を含むアラビア語の関連史料の網羅的な分析によってその生存戦略を解明する、という本論文の目的が明示される。

第一章では、はじめにザイン・アツィデインに先立つムズヒル家のファミリーヒストリーが諸史料に基づき一三世紀後半から時系列的に再構成される。ダマスクスを中心拠点としたシリアの地方名家のムズヒル家が、著者が「第二世代」と位置付けるバトル・アツィデイン二世(一三八四／八五—一四二九)の代に、有力マムルーク軍司令官のシャイフ(後のスルターン・ムアイヤド)の実権掌握とカイロ進出に伴って首都で地歩を固めてゆく過程に光が当てられ、一四二五年にこのザイン・アツィデインの父が同王朝の全書記を統括する文書庁長官(カーティブ・アツィスィツル)に就任するまでの経緯が詳述される。続いて「第三世代」のザイン・アツィデインの生い立ちと教育、官僚としてのキャリアの始まりから一四六〇年の軍務庁長官(ナズイル・アルジャイシュ)着任までの過程が精細に描出され、当時既に慣行と化していた要職の就任・維持の対価としての金銭の負担にザイン・アツィデインが耐え兼ね、同職を手放した経緯が検討される。しかし翌年、彼は

フシユカダム（在位一四六一―一六七）の治世に三四歳の若さで同王朝の官僚組織の頂点に位置する文書庁長官への就任を果たした。カイイトバイ（在位一四六八―一九六）の長期安定政権の時代に入ると、ザイン・アツィディーンは同庁の通常業務に加え、スルターンの広報官、首都西郊のラトリー池畔の自邸において国外要人を歓待する外交官、さらにはスルターン主宰のマザーリム法廷の運営主体としても活躍する。こうした彼の多彩な役目が詳しく検討され、その意義が考察される。

第二章では、同王朝の官僚の生存戦略において重要であった婚姻に基づく結合と家族的ネットワークの拡大に関して、ザイン・アツィディーンを中心としたムズヒル家の実状が世代ごとにつぶさに検討され、次世代官僚の養成、官職の獲得と継承、家系の危機の回避におけるその機能についてそれぞれ仔細な考察が示される。ムズヒル家については計一〇件の婚姻関係が史料中に確認され、このうち通婚対象としては高位官僚などの有力な文民が四件、有力軍人が三件を占め、ムズヒル家が文民家系と軍人家系の双方との間に婚姻関係を積極的に構築していた事実が明らかにされ、それが同家の存続に役立っていたとする。また同家において、家長の死亡によって残された若年者の養育や官僚としての教育が、先代の築き上げた仕事上の人脈に加え、婚姻結合によっても支えられていた点に着目する。ザイン・アツィディーンの場合は、父バートル・アツィディーン二世の死後に母ハディージャが再婚した、一五世紀を代表するカイロのシャーフイイー派の有力ウラマー家系、ブルキーニー家のアラ

ム・アツィディーンが強力な支えとなった。さらに、若きザイン・アツィディーンが官職獲得において、スルターン・イーナール（在位一四五三―一六一）の正妻ザイナブの信頼を得た彼の母の支援や活動が不可欠であったことにも論及する。その実態を関連史料の読み込みから初めて明らかにし、カイロの王城を中心に展開されたマムルーク朝宮廷政治において、文民官僚家系の女性の役割が想像以上に大きかったことに注意を喚起する。

第三章では、ザイン・アツィディーンのアラマイン、すなわちメッカとメディナの両聖地に対する関与の諸形態が、聖地で書かれたアラビア語史料も用いつつ論じられる。ザイン・アツィディーンが最後の巡礼のうち特に一四六七年に実行された最後の巡礼が注視され、ザイン・アツィディーンに同行したムズヒル家関係者やウラマーを可能な限り個別具体的に把握することで、後者の大半が巡礼後も彼のバトロネージの対象であり続けた事実が指摘される。そして聖地巡礼が彼のジャマア（党派）の形成とその紐帯の強化にとって有効であり、生存戦略上も重要であったとする。また、両聖地における彼の慈善事業、具体的には食糧の無料配給、マドラサ（高等教育施設）・リバート（宿泊施設）・マクタブ（初等学校）の設立、既存の給食ワクフへの資金提供などについて検討し、それが主に救済に力点を置くものであり、ウラマーを主たる受益者とした首都カイロにおける彼の慈善事業とは対照的な性格を帯びていたとする。そして、彼の巡礼時の宗教実践について細かく考察

してその宗教的な傾向性にまで論及し、それがタサウウフ（スーフイズム）の修得と預言者ムハンマドとの「直接的接触」を特徴としていたとする。さらに、後者の実践が、聖地メダイナにおける預言者ムハンマド廟の修繕、及び近接埋葬願望による彼自身の墓廟の設置という建設活動に明示されていたと論じる。

第四章では、まずザイン・アッ・ディーンに関する同時代のウラマーによる記述が精査され、彼が「理想的官僚」や「公正の体現者」として描かれていることが示される。その理由について著者は、前記のサハ・ウイーを含むこれらのウラマーが、ザイン・アッ・ディーンの執り成しや諸事業の便宜を受ける立場にあったこと、またこの有力官僚がウラマーに関わる広範な人事権を掌握していた事実を重視する。こうしたなか、クルアーン注釈学における独創性という点で近年再評価の進む学者ビカーイー（一四八〇歿）が、若い頃のザイン・アッ・ディーンについて否定的な記述を残した点が注目される。しかしその後ビカーイーが記した執り成しを求める書簡の分析から、一四七〇年の神秘主義詩人イブン・アル・ファアリードをめぐる論争を機にビカーイーも肯定的立場に転じたことが解明される。そして、首都のウラマーとの関係構築を目的としてザイン・アッ・ディーンが打ち出した、マドラサ創設とワクフ（寄進）設定などの学術振興策、宗教施設の諸職の斡旋や執り成しなど、ウラマーを受益者とした方策が検討され、父バートル・アッ・ディーン二世との比較を通じてその「篤志家」としての特性が指

摘される。またワクフの設定が私有財の一部の子孫への継承を意味し、家系存続への備えとなっていた点も強調される。さらに著者は、マムルーク朝の首都の三人の大カーディー（首席法官）がザイン・アッ・ディーンに関する同様の夢を同時にみたとする「奇蹟」を伝える史料記述を丁寧に読み解き、スルターンによる様々な任官にも影響を与え得るこの官僚の威力が司法組織の頂点にまで及んでいたことを指摘する。

結では、その前半部において、ザイン・アッ・ディーンの死を経て、カーイトバリーの長い治世が終焉を迎えた後にムズヒル家が没落してゆく過程が、主に年代記史料に基づき検討される。そしてザイン・アッ・ディーンの成功の要因との対照を意識しつつ、その子バドル・アッ・ディーン三世（一四五五／五六一―一五〇四）の五回に及ぶ投獄と獄死の理由が考察され、人的紐帯の更新の失敗、短期政権が続いたこの時期の不安定な政情、通婚とパトロネージの双方でウラマーとのネットワーク形成が確認されない点、さらには度重なる投獄による私財の放出によって職の獲得や維持に必要な資産を喪失したことが指摘される。そして後半部では本論文の総括が示される。すなわち、ザイン・アッ・ディーンとムズヒル家の事例研究で確認された知見は、官僚になること以上に官僚であり続けることが難しいという当時の現実、そして官職の維持と家系内での継承に多面的かつ長期的なストラテジーを必要としたということである。後期マムルーク朝において官僚の権力維持に求められる主な要素は、①実務能力、②職の獲得や維持に必要な資産、③有効な

人的関係の三点であり、③については、垂直方向に機能すれば官僚の再生産に役立ち、水平方向に機能すると執り成しや推薦者の獲得に効果的で、投獄など家系の危機への備えにもなった。こうした人的ネットワークの構築で特に重要であったのは、宗教エリートの人々に対するパトロネージであったが、ザイン・アッ・デインの場合は、ムズヒリーヤ学院などの宗教施設を通じて便宜供与に加えて、重要な諸職の任免権の掌握が顕著であった。最後に著者は、本論文で論じたムズヒル家の生存戦略は、他の官僚名家との比較によってその特徴がさらに鮮明になるとし、ムズヒル家とも関係の深いシリア系の有力な文民官僚名家で、慈善事業には熱意を注ぐことのなかったバーリズィー家の研究を次なる研究課題として掲げる。

審査要旨

後期マムルーク朝の有力文民官僚であったムズヒル家のザイン・アッ・デインに照準を定め、その生存戦略について多面的な解明を試みた本論文の卓越性は、特に以下の諸点において確かに認められる。

第一に指摘すべきは、プロソポグラフィの手法をマムルーク朝の官僚研究に初めて本格的に導入し、同王朝史において著名なこの実力者の官僚と同家系の構成員について、伝記集と年代記を中心にアラビア語諸史料の膨大な記述を丹念に読み込み、関連情報を網羅的に収集し、分析し、検討することで、その史実像を精細に明らかにし、モノグラフにまとめ上げたという

点である。特に、当時の学者たちに共有された情報について省略した部分が多く、記述の真意を的確に読み取るのが難しいとされるサハーウイーの二つの伝記集、『輝く光』と『カーデイー列伝統篇』については、太田君がそのアラビア語の高度な読解力とマムルーク朝期のウラマーに関する該博な知識を駆使して丁寧な解釈を施し、十全に活用した。この史学的貢献は高く評価されよう。

二つ目は、単に有力官僚のライフヒストリーや有力官僚名家の家族史の詳細な再構成に留まらず、「生存戦略」という問題の検討を終始貫き、同王朝のアラブ官僚をめぐる研究に新たな地平を切り開いたという点である。官僚としてのキャリア、時に緊張もはらみつつ確たる信頼を築き上げていったマムルーク朝王権との関係、婚姻結合という私的領域、聖地への巡礼とそこでの慈善活動、宗教エリートのスンナ派ウラマーを対象としたパトロネージという、一見すると相互に如何なる関係があるのかと思わせる各章のテーマであるが、それらが「生存戦略」というキーワードのもとに見事に結びつけられている。この点はマムルーク朝の当該分野の先行研究にない重要な達成であり、今後の当該研究にも新たな指針を示すものといえよう。

三つ目は、イスラームの宗教諸施設の新築、スーフイズムやムスリム聖者崇敬への傾倒、慈善救貧活動などに注目し、文民官僚であったザイン・アッ・デイン個人の宗教的な実践を詳しく明らかにし、その内面的信仰や宗教感情にまで肉迫したという点である。中世イスラーム諸王朝の官僚たちの宗教的な指

向性や実践に関する研究は総じて未だ手薄であり、本論文はその新たなケーススタディとしての価値も有している。

四つ目は、本論文が官僚の歴史研究、国制史・政治史研究における意義を有するのみならず、多様なテーマの社会史や所謂「ジャンル史」に資する部分を随所に内包しているという点である。ザイン・アツィディーンの母ハディージャの政治面の重要性を鋭く指摘したことに示されるように、女性史・ジェンダー史研究、女性たちへ十分に目を凝らした家族／ハウスホルドの歴史研究への本論文の寄与も見逃せない。さらに、前述の信仰実践にも関わるが、文民官僚のイスラーム巡礼の遂行や聖地への関与の実態解明という新領域の開拓、イスラームのサダカ（任意の喜捨）とワクフ（寄進による永続的サダカ）の史的研究に新たな事例考察を追加したという貢献も認められよう。そして、聖地メダイナの預言者モスクで説教を担う学者としての能力を備え、ウラマーの支援保護に尽力した学者官僚ザイン・アツィディーンを中心的な考察対象に据えたことが、当期の学者たちに関する新知見を副次的に数多くもたらし、ウラマーの社会史研究にも少なからず寄与している。

さらに付け加えれば、充実した一〇点の付表もその綿密さにおいて当該テーマの研究水準を引き上げる作業成果として特筆に値し、今後のマムルーク朝史研究に有用である。

以上のように新たな学術的貢献が確認される本論文であるが、残された課題もないわけではない。本論文は、複数の官僚家系を取り上げたマルテル・トウミアンの大著を部分的に塗り替え

る新成果といえるが、この先行研究に関する論述が意外にも淡泊であり、その批判的論評にさらに多くの字数を費やすべきではなかったか。また、本論文の副題にもあるパトロネージの意味は読み進めるうちに徐々に鮮明化してゆくが、序においてその概念を十分に検討し、定義を明示すべきであった。中東や環地中海圏におけるパトロネージやパトロン・クライエント関係を論じた研究は少なからずあり、それらに対する本論文の位置付けも明瞭とはいえない。また、信仰実践や内面的な宗教性の問題に関していえば、ザイン・アツィディーンのスーフイズムにおける傾向性、スーフイーの教団或いは流派との実際の結び付きについて、スーフイーに関する同時代史料の精査からさらに解明し得る部分があるだろう。太田君が関連諸史料の博搜に並外れた努力を重ねたことは確かだが、同君が未見の、スレイマニエ図書館所蔵のイブン・イヤースの自筆稿本の年代記『真珠の首飾り』など、イスタンブルの複数の図書館におさめられた幾つかのアラビア語写本にも関連記述を見出す可能性があり、さらなる調査の余地がある。

二〇二一年三月二十六日に開催された審査会において、これらの指摘すべてに対して太田君は誠実に応答し、今後の課題としてさらに研鑽を積む決意を表明した。

以上のとおり、太田絵里奈君の本論文は、マムルーク朝の文民官僚とその家系に関する実証的な事例研究として類を見ない緻密さと独創性を備え、世界的にも最先端に位置する研究成果であり、審査員一同は博士（史学）の学位に十分に値するもの

と判断する。

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・

同大学院文学研究科委員

長谷部史彦

副査

慶應義塾大学言語文化研究所教授・

同研究所副所長

野元 晋

副査

東京外国語大学アジア・アフリカ
言語文化研究所教授

黒木 英充